

繪本月宵鄙物語  
七

3154  
7



特  
3154  
7

月宵鄙物語後談卷第二

浅間嶽電山

江戸

桃華園

著



所んほしか  
市川兼次郎  
三丁目

夫信濃の國淺間がどけとり日本三箇の後嶺にして士峯おほくはる  
高山あり北上野の國あうはのつりをもたつね南の原の野をま  
を合せく東西三里三千余町に間植科依久の両郡まうてかり絶頂  
小りえて巖巖のうちより烟をば彼火前のはもとて織て火原布とつれ  
るゆはとの越無山もかくやとばり思りて幽谷二百七拾の巖窟有て  
異草孤世赤石を生け中中におくは若地獄がたま猿と八猪と下むと  
りる所ハ人跡のおよむれおあむ細峯崖空をつぎて雲の外は絶  
壁の屏風をそそ懸回雲はつくねを岩層小白う糸のつらり糸は  
半壁より霞あはれ小林海より雨を起せりかれは霞霧とにま小西園を

那の語後談卷第二

まゝにて糧熊身とかくまのすかゝるれ昔より山火焚くといふの  
 きみらのはをいひつゝのまども誰有て見らぬめもあくまゝのつらも  
 けりて税をまじける事なりとて流されどもえろの大焚といふこの出  
 つゝに硫黄の氣を焚てり申す由り山火の瘴氣を焚て火燭は  
 けり種々の美形をありてありて雨雲小和して沖天子没入し  
 悪事成るる家のうまびき来りて天火とあり此業地道の者又  
 午馬路等たつちと見えり地獄が舌の釜中より出て火車にひて  
 むらひまありて向あつて地獄落しとむらゝの事ありと心も眼も  
 お量見しつゝのあけまらん人々をばぢのわするまゝとむらゝ  
 元來地獄極楽等の事ハ仏説の確證にて虚妄の方便なりといふの何  
 れも始終の観念にのみありて人與常位の心でかゝるはて不業

邪道をのびの輩いふより甚量の悪魔をかへむとく其邪のまじり  
 ねんていふより地獄縁鬼畜生の三悪道に似く半はむとたがふ所は  
 志うれ諸善を行の家又あまなる程の慶をかゝりて衛生淨土の園を  
 結ぶ事始てうがなき事いふあはれとふけ火焚といふ山火に似  
 而るの習習我つゝとく極の辨といふのいふ小愛比し辨といふの  
 又切を經て硫黄の瘴氣を感とつてつゝ火車といふのいふあり天地  
 の間あつとつゝゆる心氣のまじり間をうかひ邪横のいふ成り  
 死人の尸小魔焚て悪事の空虛を付入り生らるのあきかゝ成  
 けりゆくと世間をためり又るれ事小あはれ山火のやうな  
 けり多ありといふもかて邪見の黒小多る外流り山の火焚といふ  
 其火車はひとゝれめり志うれ人々てははとめても其能むるを

善行のいとはして悪までも猶おそるるに人の悪行のむろひるる徳  
 の長者といふは國小するががまき豪華富のみのるれもいふ成宿世  
 因縁やありかろえまゝ現世の教やそのゆふえごうてんかろ黒刀月が  
 ぬき悪人を妻として世間小鬼とまよたせつゝ家の名をけははては流  
 らもまといまゝ一夫より世刀月がゆふ目せかろぬで重り神明仏塔の  
 礼念よも志はる名医良劑の術小も更子効はにて秘秘まきくま  
 だじく始めはむより食物一粒ごりも食することあはばしては湯  
 小一滴をも通すは肉は腐て麻のふはせごりとなしはるごり骨小  
 皮をまきせらるる小似るりらや息も利切らんあまや命も絶たてるん  
 とぬ肉もばむはじけてるひ死に死なる半死待より外のこもあま  
 窮病にぬ下りひくこ凡十四五日さるとの同益と夜とのわらちさく

看病つゝ自ぬさるるは夜後の者もよひく精神つらなると病者  
 のかろふ其候はて後なるもあひ人の足と枕よりして前後はるは  
 形もあつて是方角はじむまも耳のりも常あつて夜食を要す  
 考る者も人もあつたりまろふあつて夜時刻に垂らてまればこれ後  
 かひ小後回がけはるごりも再ごりてはびびれ夫で長者が家は鳴  
 わるる震動をさるればはじくにもつれなると者ごり察したてたは小  
 月も自然見えせてよもそこの中中もといひあくる間も多雨小なる  
 雨あつれば音妙小小をまじりたるごりもえてごりくも噴附するも  
 れり小雨も中五本が程を徹するごりも降るははは一つのはのうたど  
 どのの内入るしとしく一面の煙火もつちばりて天よふまびるる  
 ねる中小赤い鬼つ青い鬼つ火の車輪をひつぎてあつくとま



八雲の角  
あまのまき  
あまのまき  
あまのまき

都の吾後



冒物

黒刀自

至る所見するものあつてはうろ六十八人集へて今も同境を先まきとて  
 硫黄の火のきき色は鬼多紙のくまき馬刀が頭をむぎとてはくむ  
 太頭へ馬のかまはして桐力士はた深のむねけけたる赤がねのたすを  
 うけ赤鬼くはさるぬあしのかくもあるれよと馬刀が桐中城候をい紙  
 ちだるふわくふ二つふり切て車輪の中うち通さう刀月ハツとてまきさ  
 けぶとてえいが熱身火燭と成てるのう中ふよあまあしりまて若  
 つ水車の早瀬の浪まぶるがわくひな形をちして呵々呵々と鬼わ  
 らひて床のうちは陽二つみやを紙積てかきけをわく小消せ  
 一迅の風を吹よとていさぶのうも減て跡まへくもをさうて  
 なる幾も不思議も奇怪もやをうへあうりう其夜柏妻殿の家  
 士某と角の伎ありて供人六十八人を百果大畑の里しり人をより川中  
 名島の後し場を也桐原の陣屋中七階を造りて菅原の長者は屋の  
 あよりより一時の火ははして空中よりわたりて原野紙未申へ  
 て湖間の山の中央地獄が火のあうりうとては語りうらまの  
 火柱率也ありう半後まをわい合せりやうて其夜うらま  
 のうらまふゆて長者のうらまをいして血のまじりて紙をて紙刀  
 自をうらまふゆていひはさるぬぐまはじりてむきまゆつや紙を  
 ちるばりふらうりちが欵き小仙怨をいふゆかくとわくとをい  
 さまうらまあうりうらまははしてはさるぬ宮御中て諸僧をまき  
 供養残るかまうり退善をいふとて三十二日分剛大蛇候鬼等紙  
 紙ひて修善寺行高のうらま刀月が未末成仙の四徳の外いふ地獄  
 あうりうそれうらまうらま病も月もは紙候方小をむきまこ小仙候身



ひさぶらて人の狼狽をうらうらうらひさうの毎刀自とひ人もわらう  
 性我將豪情はこよたゆづもあゝぬわぶたえあぶなくもあゝぬ  
 性もあの中悪い貪欲の道は絶をいりまがる程もいりまがる如く  
 おいすく物をねらて畜類の中絶をを絶い毒程絶道をををりま  
 だて金銀をたぐつねわばう五年か圓をまらばて家産はれ  
 も年五十歳はてあ中の病をけ面色蒼々しく小女まねとらへ  
 口先とがり歯ををみ出眼ははゆめごとく小似て只うたれあまのまき  
 らりさばくのなま言然といつて程で母の悪事致おれを咄人の好  
 てゐると絶絶をい志あていりの毛孤おしに臨終のきいひりて大  
 るる猫の如きりの来りて娘よりけあうら孤志とがまらひるごとくあ  
 つ短い絶絶にたまはとめり豊いふま毒や如毒はて母小慈訓のた

たりは絶絶絶送送絶絶いゝなるのむらひまのあうら小ゆ成をせし夫道の  
 絶絶に及はて神も併し見そまさせたまはざるあさり絶絶はけく  
 半のの絶絶もいふかは絶絶道のの絶絶も細とる家のおり  
 ゆたさんだといつ程絶絶にいふあゝかまをくやく絶絶ら入も  
 け業園のさうとてざる程へ神おが身はらふおまをいり絶絶はけい根  
 のたえはる半のさうとてざるありこまはれ一のさふおがさうとてま  
 介もあれ一人をそと縁人をとらへこまらうのまゆてま事さふ  
 あゝがはれこへ件教を度の上はる限はれ只今まあらり小人の心の  
 後ありてよれもあゝねもつれおりの絶絶と絶絶の絶絶又君やある絶  
 の曾平ややと且悔且歎きて遺絶たせる人との身のあやまちを段  
 してら絶絶はる子あかろろねとそ有絶絶れそめくは貴後絶絶は人



のころびごとくすかじしむゆきんはて貧乏戚憂の人のころびは  
 てあつじむるなるふ不義はて家たる家を先祖の貧乏はてし  
 中懐返しうまれまれば奥づう小立のりてゆらば家をも祀さ  
 申し山の如く小孫うさの丘のさくまなくる金根杖家残るの  
 施布物小分散せんとおひまらるる人の後貴しとり可余りなり  
 百もの宝篋をつとて百代不易の長久を祈るも家も後悪の余  
 消滅せむ悪業の因縁をかくとのをさく万位の理法と持  
 未来の脱の果をおるも身は一箇の善根されば鬼神の冥助  
 らんたる申すかたはなりと初るるなり

水内川の孝徳

志うありらるる小更級山の麓なる寂莫村の剛作いさ人の母親白く

至孝ありりたも年々柱の太切なる半の襦袢やまは是とても前  
 世の因けいさごころふを果さばいし半やありん事業の災難を  
 うけて言ひけいさかて逆子被屋のうらふ死にらるるや不仕なる母の  
 歎き申言がはしと初めも述つじがさうらうらうかくても果しあ  
 りたはて瓜りもてあまが瓜貫ひけそらく小葬のつらむはじこ  
 衣かりの遊福をほねく小娘の女お悪徒善も早愛想をてま  
 しもちち郎小んをらしてられいそれい経の病なわらば多うま  
 る瓜獲ひて後里小舟を失ひつらん地へ遭らば鬼ふも角中も善  
 おまといつらて身犯す悪事小組一白うをさも山へ捨卵者をもつ  
 きて伯母ももうししく形うをせらぬか女の果あをいさるる人  
 小ぞわらひあくれうかくて剛作は悪業の孫死を遂るといふも孝ん



刀匠の言

刀匠の言

海

一念國靈と歎て多く母の危難をまといはれ向うに  
 鳥冥のたまけふよりてさる比久米路のうけはれおぼろしく  
 崎の いろの坂もどそをふくたまけふ世より寝美して極ぐひの  
 やく善光寺の門を家持が賞求めたるまづりやとづく北村持持を移り  
 唯者の宿は烟も何いとて不覚く立つまが知ひも是よりや遠を  
 んくぬれ善光寺の所は移るる小僧を区系しせりるをたて大恩及  
 主の所法の中は唯悟我んの真実を説て孫陀本願の救世の相まひ々  
 正法に放てこそ是常も不可思儀の事はとて下りい御寺のかがりうら  
 更におひえかるるかふるれ身特ありこそ小出野の玉成を助くる行中  
 里も能く説く人をも定する而性あり支親常より善光寺に如來を依  
 るもて唯名念の勤行おぼろしくあつりしをその日におぼろしく

こそ小あゆみ坂をまびらるる門前の町家も縁宿して朝露の糸をせせが  
 むまたつんは中お隣村を去り歳を法は牛飼の重を死よりよの小好遊  
 もく小僧屋の店も入るる会比小物語り時を又備るるは父の助丸  
 能くよりの母も去り身まかりたるが隠終り急ぐる衣類を若くして候  
 く過去の吐けりし圓の徳種おぼろしく腹たる美物のまを法に母成  
 ちばとして墓野と水のわげふむるを移るるれとの程を成約せり極小  
 小傳りて其志とて見せられは音書とて夜談よししもながみあきゆく  
 云出く見ればとそを石にたてあり持ありたるまねを合せるとまじし  
 遠くを動符と合するふくおまへんく大い小終るる其不思儀なる事な  
 或は終且墓野がうらむいさるるを移せりしよりかふる奇異の事より  
 ころのこふぶくばりて縁多人の目ま唯常た人のみこえりてれは





由り紙定めてかゝる秋は先福有あきあき小河こがわの天網あまのあみ言さる中興ちゆうきゆうか更級さらしなの雲  
 捲揚まきあげ山の景色見んとては上田かみのたの宿の中陣ちゆうじん小雲こぐもをよせをたまひつま  
 ばる骨こつこ八筋やっしんの宿はほむとてとある古寺ふるでら小中こちゆうかゝる夜はぬる小伏こふしのあま  
 古長者ふるちやうぢの家いへのまゝの糸いとを捲まかふまはまの身みは終はつりといひあまを  
 能のうが病びやうといふ今いまもさへはげと病びやう者ものまゝに病びやうを病びやうする死しまよと  
 心こゝろぬまもて粟あは飯いひつむむがやく日ひ比ひをかけける小使こしの中ちゆうて結むすまは流  
 下くだ流りゆうる小使こしのあまをあまととまひらうの物もの等らう用ようは悪あく念ねんのたまはる  
 きるらんが按おん相違さうゐしてまを病びやうひ日ひやく快くわい方はうはなびらぬ音ね人の  
 か紙しうち中風ちゆうふうを病びやうひのし下くだ帯おびあひるふまのて企い謀ぼうのしる  
 りもづる口くち惜しといひしてまを紙し失しふやと悪あく徒と善ぜんふふも  
 たりひてとある酒しゆ店てんを夜よをぬくふふと密ひそ申まをも人の耳みみも  
 と善ぜんなるまぬとまをまは念ねん念ねん地ちの冥めいはじつ道みちある前まへが宿しゆくのさうへら杜  
 の辻つじ堂どうのころてひそふ縁えん付つをぞあづりしる。

賀場池の白波

板いた亦またくふ先達せんたつこそあ天破あまやぶの禪ぜん徳とく比ひが善ぜん光こう寺てら小使こしの還かへふ  
 と位ゐ濃のうの昇のぼりやいりふてまをまと列りゆうまは善ぜん道だうく小こわさるま  
 佐さ父ふの那なまの輝くわい井い決けつといふいなつとあまきつうらるが悪あく徒と善ぜんふ  
 附つく博打はくちたむかして輝くわい井い決けつをまの出で志しをく別べつ和わといふ麻あのあ  
 宿しゆくまかゝるれいもかの博打はくちの後ごは疎そしてはしく宿しゆくまあひまを  
 小使こしの旅りゆう宿しゆくの代しろはかたまをまをせむふらありてあやむああも  
 女にをまづめてはくもんまといふ心こゝろえよう悪あく徒との中ちゆうまをまを代  
 ねむいゆぐむめりのまあじとゆくのまづりしてりる紙しいさむらう



文六  
 悪者堀んと  
 せいと人とする不



善大

昌物言行言卷

十三

かの女ふもひぬくめ 恨の才屋て 見くは間をくふ待合しと 約連て ちよ  
 り夜ま令ぬけさぶらして 田中の窪町なる今うり掃きと け方の ちよま  
 き ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 とあつた 詮方ちよ時 能るれ先鬼もるれ角もあれはそこ ちよと ちよと ちよと  
 るる 紙待く 濃泉守を 逃去は ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 かぶらうと 返あうり ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 の 原さぞ ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 うるる ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 て 物音 ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 れ 女んも ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 りて 柳も ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと

を ねむ ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 東 断ある ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 より 見ま ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 の ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 秋ま ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 伏 ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 此 ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 女 ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 痛 ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 酒 ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと  
 ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと



宿掛輕井の四一夜の夜りしる者と早くも覺れ見てもるやまに  
 善きいりの運とありさるを種くやおひ又きたのまなり  
 て振りぬふさるれかかれゆにわれさといふをいといふ二人てか  
 く抱持せんとい語りあるはさとりて小判をいふ行り見せて所申と病  
 の下ゆえとさうなり六善きいも区て申さずと進うけふ遠  
 むうの方より燈籠の光三つ出さる種馬の鈴の音はえんれに  
 り人目子かりおよよかほと種くものふ小舟をよめて友人送行人を  
 さげぬる小縁人いさくまじりて女をいへ何ゆりよをばげ種を  
 救ひたまりてして己れら友人の半成告ぬるぞこは運文もまづれり  
 て小路隔ててぞうせりなりて小舟をよめて來り人誰るぞと思  
 小舟舟殿の位下縣の小舟船中て家の人子幼達とてかく早  
 急なる孤女を救ひてさる候とありしも幸ある

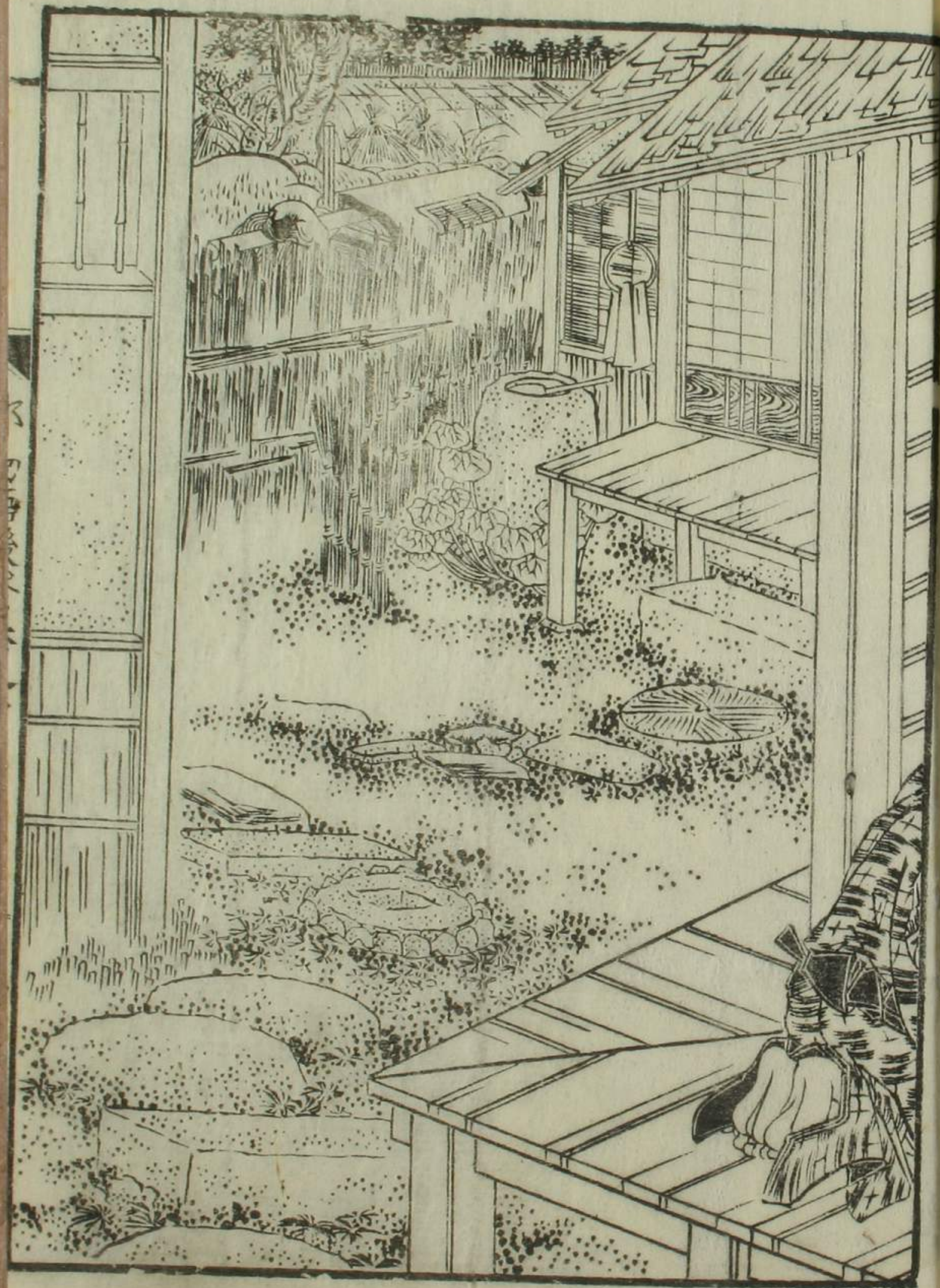
上田里の訃言

かくて剛作が母知若成長なるふまふいといひ白く志小孝を  
 其國ををる母の枕をまよめ先小舟を覆れをれあて  
 り秋まふ目紙をて母が衣のうまを重ねて飲食おる小舟に  
 のぞき候せり小舟舟殿より二人の扶助ありといふ人もありて  
 せらるる畜類も男わらるれをい上り靴め働いたて母も安ん  
 こらに紙の張紙小舟を魚の種人のも物もち持して錢を  
 秋るは家手降りて弟履ま鞋さく孤舟り或は縫を織り母を  
 送行人も善光寺の者知若とて珠の針貴美一人の品は百  
 ちてく麗美あまふ物なり見る人毎に振きてありのまは  
 けり



前宿の辻堂ふくとも母もまよとまよふとち消しゆとよ我た松の  
 石まほり覺るは世ま似る原りのまぐちりる事おまが遺言  
 ある處ともまじつ何ぞ鬼もいそ今實は法もくもあれたるに  
 かなまといまふともいまきふあ ねのめまどまぐちよをよ給ふわ  
 らのらふ女んまおりの中へ酒さかふまわで寝かえまは志にさあぐむ  
 又ゆは秋のこくろくろくさの振舞のやせんを色をを流るる管意さふふさ  
 酒をまのりれいふ六つさうつぬにじつあく迄さひあ後をも知しとぞ  
 打針の女は区秋竹打し傍ひきさるる外れの温ぬふまのりささば  
 して小まね子親を扱られ涙りふ半紙にしてりとの家来違ふさ  
 先それまごころ願ふれと願ふれ女りのまろふたかぶら今宵  
 又けおとそ欠けま違事とらるるぬ板欠か砕けむらひるまのりやの

りしふりててと一親ま違さうとたわき紙さぐまんとまのり男その人  
 は産補の客よりいそ家山一もあれた果そのまとも咽てわらへん  
 ら宿のあまよはかぶら口ふさぐてらるる女口のさあひて殊まけ家  
 添藤いまきほうばも代書扱けんとなりんあつたま鬼角まひさか  
 めて並るれいも次の間まゆりし法師の客のりま移つてそれのりよを  
 むのがたりて母の果を教ふる事いもも咽し便りぬき此紙まきひと  
 まうりて親しもいそそれとさう後ならぬ鬼王法師もひらくまよめて教  
 信しわきりて事いふ事ゆりぬきとて欠ま返出て女徳らつた女ははに  
 何やいもいとまよたてけは和さかふ小用者もいひあり麻まどのま  
 ねまらんととせと替りてたりて外ぬれ秋の何なる坐ふら善若もいそ  
 び欠六の碎ふら女は産補は添藤まの神まのりまは暖し中をかへんと祭



鬼王

文子 鬼王

一たをいひ一人の男来て切戸押咄ふ為て期する事ある鬼は法所  
 女も同じ世をうけ合身小用そのかうたきく女とあはるさあまにさがる  
 事ふらうつらひ申すて多だれそれやりと申す法所のまのりえり送り  
 取事て鬼は法所の法所事のかも瓜附きえと事うて鬼屋のまを取  
 のありかてまをさうて六八目公家と鬼は法所の却出く致立  
 及このひらか宿の者をめく中々は我道念めふ勤めする武士おるが  
 主人のま瓜さるにまはけけ御書紙を頼り善光寺まするあるふあ申す  
 昨夜はあまゆて今夕はる小銀を入るは法所法所の口をどけてあうあ  
 所枕さす盗人有と事うりまを真まお宿の人の付れまうまはらね  
 といへり法所たぬりじにたされ終てけ所をませはる事あうがくま宿  
 のまもかり合ともさうぬまふ心小赤信るやう小う取のま事い有るた

事あり我は法所はつまふる身といへり小條家より頼りまれの銀を  
 堂前の領を海押取らゆりつら申す此申の挿換まうて申御ると  
 申有るまと條を申す小宿の者を始してまをり身小まをり  
 かもかり合とあるとね申すむじにまと誠懐さく身らあり初又法所は  
 ちまじひまや中ら法所酒の取まめくる女今夕咄ふ小西法にしてまをり何  
 へはるまやと尋ねるふ名を法所にて欠り申すの申す法を信る小まをり  
 へはる方角瓜志してその行執と連立形てまの申くまは尋ね索む  
 申す法所してり又わうさる時法所小まをり申す法を信る小まをり  
 申すもらふ不怪は彼女よりといふ名宿の者より為法のかり合法所  
 しくおのい欠小種くの事法して鬼は法所か花包を替あせ善光  
 寺はまると法所まらるまらり次まらりかくてま後川の法を法て

是より境内を二見せし中とありのり邊まの女のことるれは樹  
 邊をうかくと心なく人自まかほ逢りやま遠もいつて果ぬ逢ふ事も  
 あらふ事あふんかこ返り我と共く小来まづいそれて果後わかび  
 かく迷惑るる影付いふかきまるとて附まひ都ぶいほしてをくれ  
 屋をいぢひ見たまふて、草鞋の店もきれまはまよを調へま  
 たく様これな侍とぬれりて傍りてとある木のゆふ花をむらむ  
 欠古の山うげま婆のかるまへ静くあゆむ鬼王法師のうげ見えぬ不  
 いふまうなると死改をも見えりてからり初甲く報ひまづみさるふけ  
 るう後の程とせむらういま

月宵鄙物語後談卷第二終

